

日本語の敬語使用とポライトネス

The Use of Honorific and Politeness

徐 璐

xu lu

西北大学日本 学部 中国陕西省西安市 710069

Department of Japanese, School of Foreign Languages, North-west University,

E-mail : xulu2004@163.com

要旨

語用論の角度からポライトネスを研究する Brown & Levinson のポライトネス理論は、普遍性が高く、どの言語にも適用するとされているが、敬語体系を持つ言語文化圏では、例えば、日本語には果たして当てはまるか、その普遍性をめぐって激しい議論が行われてきた。本小文は先行研究を踏まえた上で、賛成と反対のそれぞれの意見を示し、発話効果としての語用論的ポライトネスの観点から、敬語の本質や、敬語使用の目的と効果を分析していき、ポライトネス理論を敬語の有する言語にも当てはまることを認めながら、問題点を指摘し、それを補完する方向性を検討するものである。

キーワード：敬語使用、ポライトネス、適応性、距離

Abstract

The Politeness Theory of Brown & Levinson is labeled as a universal theory to examine the issue of politeness in languages from pragmatic perspective. Whether it is applicable to Japanese, a language with honorific system, however, is challenged and heatedly discussed. Based on findings of previous research, the present paper lists the views of both sides and analyzes the essence of honorific, the starting point and pragmatic effect of its' use. It confirms the applicability of the Politeness Theory on Japanese and elaborates its' deficiencies and then advances factors to consider in order to make the theory perfect.

Key words: the use of honorific; politeness; applicability; distance

I B&L ポライトネス理論普遍性に対する批判

Brown & Levinson (1978、1987) のポライトネス理論が提唱されて以来、目覚ましい発展を遂げている。社会言語学、語用論、会話分析など様々な分野に影響を及ぼしている。

普遍的な枠組みとして提唱したこのポライトネス理論に対して、日本語のように独自の敬語体系を持つ言語や、社会的・文化的規範による言語選択の制約がある文化には、西欧の言語を基準とした B&L の理論には果たして当てはまるかという「普遍性」に対する批判がなされている。普遍性に関する批判は 1990 年前後に多く発表された。中には井出 (1989)、Ide (1989)、Mastumoto (1988) などがある。批判の焦点となるのは次のいくつかの面がある。

(1). フェイス概念の取り扱いについては B&L の枠組に当てはまらない。井出(1989)¹ は、B&L の枠組は個人主義が相互行為の基礎となっている西洋のバイアスがかかっていると、集団の一員であることや役割が重視される日本社会においては、個人のフェイスよりも、ある状況下で規定される役割や社会的地位の方が相互行為の基礎となり得るとした。よって、個人主義志向の西欧社会とは異なる集団主義志向の日本社会では、フェイス概念への理解、ネガティブ・フェイスの概念が果たして有効なのかと疑われている。そして、日本語の敬語とポライトネスの根本的な違いはフェイスの内容そのものというよりはフェイスの重要性の違いであると主張した。

(2). 敬語使用の動機やそれによって伝えられる情報が B&L の理論とは異なる。B&L の理論によると、ポライトネスとはお互いのフェイスを、脅かす可能性のある場合に、それを補償緩和するための方略、ストラテジーである。敬語使用をネガティブ・ポライトネスの一部として位置づけられている。Matsumoto(1988)² によると、日本語における敬語使用の目的は相手の負荷を軽減することによって聞き手のネガティブ・フェイスに対する配慮を示すことではなく、参加者間の上下関係を示すことであるとされた。

(3). 井出 (1990、2006)³ によると、意図的なポライトネス・ストラテジーの「働きかけ方式」を中心な概念にした B&L のポライトネス理論は、効果的に目的を遂行するための合理的な意図に基づいた「働きかけ方式」と、社会・文化的慣習に基づいた「わかまえ方式」という能動的と受動的な選択二つの側面を含む日本語の敬語使用に当て嵌まらない。

以上見てきたとおりに、B&L ポライトネス理論の日本語への適応性をめぐっている議論された。日本語は確かにほかの言語と異なる特別なところもあり、ポライトネス理論もさらに補完される必要があるが、B&L ポライトネス理論の普遍性を否定することはできないだろう。

II 敬語使用とポライトネス

1 Face について

社会学や社会言語学においては、face とはコミュニケーションの参加者が互いに与える、協調しあう公的なイメージであるとされる。face の概念を提唱したのは Goffman であるが、彼は、人と人が対人を通して行うやり取りの中の、「肯定的な自己像」を face と呼ぶ。B&L (1987) は、この Goffman の face の捉え方に影響を受けながら、face という概念を鍵概念として、独自のポライトネス概念を構築したのである。B&L の理論では人は全て「フェイス (face)」をもち、すなわち「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」という 2 つの側面を同時に備えている。「ポジティブ・フェイス」とは他者に理解されたい、受け入れてもらいたい、好かれたい、賞賛されたいというプラス方向への欲求であり、「ネガティブ・フェイス」とは他者に邪魔されたくない、立ち入れたくない、踏み込まれたくないというマイナス方向に関わる欲求として捉えられる。「ネガティブ」が「否定的な」という意味ではなく、言語使用者の自分の「領域」への基本態度と自分の権力が他人に干渉されたくないという欲求を表している。この基本的欲求としての二つのフェイスを脅かさないように配慮することが、ポライトネスであると捉える。

フェイス概念の取り扱いについては、Matsumoto (1988)、井出 (1989) は、その普遍性に異を唱えている。Matsumoto によると、日本のような文化的伝統の中では、人々の主要な関心は自己の領域を主張することではなく、むしろ集団のメンバーとして受け入れられ続けることであり、相手の負荷を軽減することによって相手のネガティブ・フェイスに配慮を示すというより、相手に依存していることを知らしめたり、参加者間の上下関係を示したりすることである。日本語は負荷の軽減や行為の自由より、相手と自分との対人的関係の認識により大きな価値を置く言語であると主張する。

B&L (1987) のいうように、人は誰もが他者に受け入れられたい、他者に邪魔されたくないという 2 つの相反する欲求を同時にもっている。そうすると人がコミュニケーションをするときには、多かれ少なかれ相手のフェイスを脅かすことになる。脅かす度合いは話し手と聞き手の間の社会的距離 D 、と聞き手が話し手に及ぼす力関係 P など対人的要因によって決められる。滝浦 (2008) 4D は水平方向、 P は垂直方向の人間関係を表し、いずれも社会的人間関係の距離を表すとする。この社会的距離には、固定的な地位だけでなく、その場その場の力関係を反映した上下関係など、一時的な関係も含まれる。この「距離」という語用論的視点によって、「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」をそれぞれ、「距離を詰め、他者に近づきたい欲求」と「ある程度距離を置きたい欲求」という発話の運用効果から操作的に捉えることが、有効であると考え

る。こうして敬語はポライトネスの部分となり、敬語論をポライトネス論へと接続し、敬語体系を持つ日本語もポライトネス理論に当てはめるであろう。

コミュニケーションにおいては、相手のフェイスに気を配り、言葉を選びながら、円滑な人間関係を構築していくことがポライトネスであり、文化を超えて会話の参加者はお互いの自己像を大切にし、相手のフェイスを配慮、協調しあい、お互いのメンツを脅かさないように、つまり不愉快にさせないように気をつけながらコミュニケーションを行うのは世界共通の原則だと思われる。もちろん、脅迫、恐喝、命令などの言語行動はポライトネスの範囲に含まれていない。こういう意味で、東西を問わず一致していると考える。

上記のような B&L に対する批判は、B&L の人間の持つ基本的欲求として操作的に定義されたフェイスが、面子と訳され、文化的概念として捉えられたために起こるものであると思われる。

2 敬語使用の動機

B&L は、欲求を「ポジティブ・フェイス」と「ネガティブ・フェイス」に分け、フェイスを脅かすような行為を、FTA と呼ぶ。ほとんどの言語的な行為には、多かれ少なかれ FTA が存在していると考え、FTA 危険度の見積概算公式を次のように表した。 $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ 。つまり、ある行為 x が相手のフェイスを脅かす度合い (W_x) は、 x という行為が、ある特定の文化の中でどのくらい相手に負担をかけると見なされているかという「行為 (x) が、相手にかける負荷度 (R)」と、話し手と聞き手の「社会的距離 (D)、聞き手の話し手に対する「相対的力 (P)」の三要因が関数的に働いて決まってくるとしている。この3つの値を足した W_x 値が、その場面の性質を勘案した上でその行為のフェイスを脅かす度合いを示すものである。そこで、この公式で算定された W_x 値が大きいほど程度の高い「ポライト」な言語行動、すなわち、「ポライトネス・ストラテジー」を必要とする。主要なストラテジーをあげると次の5つある。つまり、① FT の軽減行為を行わず、直接的な言語行動を取る。② ポジティブ・ポライトネス。③ ネガティブ・ポライトネス。④ ほのめかす。⑤ FTA を行わない。 W_x 値が低ければ低いほど①、②のような直接的・明示的ストラテジーが使用されやすく、逆に高ければ高いほど③、④、⑤のような間接的・非明示的ストラテジーが選択されやいとされる。敬語使用を B&L の理論では、ネガティブ・ポライトネスの一部として位置づけられている。

日本語が、他の言語に比較して複雑な「敬語」体系、語彙を有している。日本語の敬語使用は社会の発展に伴い次第に変化してきている。待遇される人物だけを考慮して用いる絶対敬語から待遇される人物とともに、その周りの人物との関係を考慮して用いる相対敬語へと変化の方向があった。また、相対敬語の中でも、上下関係に基づく敬語使

用から、親疎関係に基づく敬語使用へ、つまり、上下敬語から左右敬語へ、身分敬語から役割敬語へ、地位敬語から商業敬語へ、力、権力から親疎へ、縦社会から横社会へ、敬意から心理的距離へ、ウエシタからウチソトへと多様化してきて、変わりつつある。現代社会においては、「相互尊重」の気持ちを基本として敬語を使うことが重要である。いわゆる「敬意表現」である。敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それは敬意に基づいて選択される言葉であるが、敬意は必ずしも相手に尊敬の気持ちを表したり、丁寧にしたりするだけではなく、その人の「社会的な立場を尊重すること」も敬意の表れの一つである。仮に尊重できないと感じられる人であっても、その人の立場・存在を認めようとすることは、一つの「敬意」の表現となりうるのであり、その気持ちを敬語で表すことは可能なのである。敬語の役割の一つには、「社会人としての常識を持っている自分自身」を表現するという側面もある。また、教育レベルや社会的地位の高さを表したり、いわば「ちょっと上の」クラスに属している仲間意識を示す手段として機能することもある。もちろん、皮肉やからかい、自分自身の行為を敬語で待遇するいわゆる自敬敬語の用法も存在する。こうして、敬語は単なる上下関係ではなく、その相手と自分との間の立場や役割から考えて使われる。中には、仮に自分が年長であっても、相手を立てて使う場合もある。そもそも、過剰でなく適度に敬語を使うことも大切である。

総じて、日本語の敬語使用は、敬意と親疎の情の表示という二つの側面がある。敬語を使用することには、聞き手を高める意味と聞き手に距離を置く意味の二つがあり、敬語の不使用には聞き手を下げる意味と聞き手に親しみの情を示す意味とがある。菊池(1994)⁵は敬語の使用の際に、相手とどのように距離を取りたいか、どのような関係にあると捉えたいかなどの、話し手の待遇意図が関与する、としている。滝浦(2008)は敬語使用はあくまでも距離化の表現であると述べている。距離とは、対象人物を“遠くに置くこと”によってその領域の侵犯を回避するネガティブ・ポライトネスの一形態である。対象人物を遠くに置くとはその人物を“ソト”待遇することであり、定義上それは、その人物を脱距離化的に“ウチ”待遇することと相反関係にある。それゆえ、敬語使用の裏面にある敬語の不使用が、対象人物を“遠くに置かないこと”によって領域の共有を表現するポジティブ・ポライトネスのストラテジーとなりうる。日本語の「敬語」という言語形式は、話し手・聞き手・言及される登場人物の三者間の関係を“距離”の関係として表示するシステムである。敬語は人間関係を相対的な距離の関係として構成的に表現する。こういうように理解すれば敬語はポライトネスの部分となり、敬語論をポライトネス論へと接続してゆくことができるであろう。

敬語体系を持っていない英語などの文化圏では、相手との社会的関係D、つまり上下、

親疎などの関係、話し手に対する力 P、そして、その言語行為 X が文化内でどのだけ負荷になるのかによって、言葉が使い分けられているわけであるが、これは、機能からすると日本語における「敬語」使用と大差はないと考える。いわゆる「敬意表現」、ポライトネスは、どんな言語にもあるということができると思う。

日本語の敬語の中にある「謙遜、謙讓、自分を低め、自分の動作をへりくだることによって相手を高め、立てる」ということは B&L のポライトネス理論の中には含まれていないという指摘もあるが、それは鍵概念のポライトネスを発話の運用効果として、「語用論的ポライトネス」という視点からではなく、言語形式とその相手、状況、場面に応じた言葉の使い分けに焦点をおいて、言語形式の丁寧度や言語表現の丁寧さ、礼儀正しさを重視する「規範的ポライトネス」の観点から論じて、敬意、尊敬、改まり度、丁寧さなどの用語と捉えられてしまったからである。言語形式の丁寧度がいくら高くても、用い方によっては、相手を不愉快にさせることもあるのである。

よって、上記のような批判は短絡的での的外れであると思う。日本語の敬語使用は B&L の言われたとおりにネガティブ・ポライトネスの一部として位置づけられることは、確かに議論する余地があるが、どの言語・文化にも共通するポライトネスの普遍的な原則と、各文化における固有のポライトネス・ストラテジーの区別を無視しているために起こるものであると思われる。さまざまなポライトネス・ストラテジーの中の一つにすぎない敬語の理論とポライトネス理論が混同されてしまったこと、さらには、彼らが言う普遍性が各個別の言語使用の原則そのものではなく、日本語の敬語も含むより広い言語行動選択のメカニズムの普遍性であることが理解されていなかったことなどによる誤解から生まれたものであると思われる。異なる言語社会において、ポライトネス・ストラテジーが異なるのは当然のことである。上述の批判はただストラテジーの異なりを指摘したに過ぎない。

3 敬語使用の能動性、受動性

Ide (1989) によると、ポライトネス体系にはストラテジーとして、効果的目的を遂行するため、話し手の合理的な意図に基づいて選択できる「働きかけ方式」と、社会的慣習に基づいて選択される「わきまえ方式」との二種類がある。さらに、ネガティブ・ポライトネスの一部として B&L の枠組みの中で位置づけられている敬語は、たくさんの言語形式の中から話し手の意思で自由に選択することができるストラテジーに基づく選択とは、選択の範囲が限られている；その選択が社会語用論的、文法的に義務的である；フェイスを脅かすような行為に限らず用いられ、ストラテジーとしての話し手の合理的な意思に依存していないなどの点において根本的に異なっていると述べている。また、井出 (2006) によると、敬語使用は社会的距離、親疎関係、場面や話題の改まり度、相手への負担度に応じて、社会・文化の慣習や規範に従って選択された「わきまえ方式」

であるのに対して、ポライトネス・ストラテジーは相手のフェイスを脅かすことを軽減するために能動的に選択する「働きかけ方式」とであるとされる。

上述の見方は、敬語使用に関して、社会的慣例化された言語使用のルールに則った「わきまえ (discernment)」としての言語使用だけでなく、話者のストラテジーである「働きかけ (volition)」としての言語使用でもある。つまり、社会的、文化的システムによって拘束される受動性と話者が意図に基づいて言葉を選択する能動性との両面、二重性がしばしば誤解されているからであろう。コミュニケーションは、社会システムと言語システムによって拘束される受動性と、発話者が意図に基づいて行為する能動性との両面によって構成される。人はコミュニケーションにおいて、完全に受動的な立場に立っているわけではなく、話し手は相手に表現すべき関係と表現したい関係を発話において、受動的かつ能動的な主体となるのである。選ばされつつ選び取るものとしてのコミュニケーション行為を「ポライトである」というわけである。

敬語の選択が必ずしも、つねに自動的、義務的なものではなく、規範を守りながら、それまでの経験や好み、意図によって自主的に選択することもありうる。敬語は確かに敬意を表現する。しかし、敬語というシステムが直接表示するのは「距離」であり、距離が第一義的に示すのは、対象人物との関係が“ソト”的（疎遠）であるか、“ウチ”的（親密）であるかの対立である。こうした「距離」を、人は選ばされるだけでなく、また選び取る。表現すべき関係と表現したい関係とをともに含むそのつどの発話において、話し手は受動的かつ能動的な主体となる。(滝浦 258) つまり、対人的場面での敬語使用は規範に基づいた選択と話し手の意図による選択との両面があるはずである。B&Lの理論にはその両面が盛り込まれているわけであるが、この両者の関係が明確な形で描かれていないというのも事実である。

Ⅲ B&L ポライトネス理論補完の新視点

B&Lのポライトネス理論はポライトネスを社会的距離、力関係、相手にかかる負荷度などいくつかの重要な社会的、文化的変数が総合的に考慮され、相手のフェイス侵害度が見積もられたうえで、言語行動が決定されるという動的な捉え方に変換したことは最も評価されるべき点であり、さらに敬語のもつ言語とそうでない言語を同じ枠組みで捉える可能性を示し、現段階の発話行為レベルのポライトネス理論としては、最も包括的であり、有効な理論であると大きく評価されると同時に、いくつかの脆弱点も指摘された。

一つ目は、B&Lのポライトネス理論はポライトネスを文レベル、発話行為レベルで捉えているために、より長い談話におけるポライトネスをうまく説明できないばかりで

なく、構造の違う言語の比較がしにくく、敬語のある言語における方略的な言語使用や敬語のない言語における社会言語学的規範や慣習に則った言語使用が十分考慮されていない。実際の会話は、一発話行為で成立することもあるけれども、ほとんどは話し手と聞き手によって展開される複数の発話行為で構成されているので、談話レベルでの分析も必要となり、少なくとも話し手と聞き手両方のフェイスを同時に考慮し、一発話レベルの分析にも談話レベルの分析にも適応できるアプローチが求められる。

二つ目は、過去のポライトネス理論では、談話レベルでも分析が行われなかった結果、「ポライトネスの二面性」を見逃してしまった。つまり、「特にポライトでもないが、失礼でもない」言語行動、「インポライトネス」の位置づけがされていない。

三つ目は Face 侵害度の公式は話し手に焦点を当てたもので、聞き手の側から、および、話者の相互作用の観点が、十分に組み込まれていないなどの問題点が指摘された。つまり、B&L (1987) のポライトネス理論では、言語使用のストラテジーが常に「話し手」の視点で解釈され、「聞き手」の視点がほとんど無視されてしまったため、ポライトネスを相対的に捉えられない。良好な人間関係の構築を考えるならば、話し手の一方的なストラテジーではなく、聞き手の視点による効果も考慮に入れなければ、両者間の関係は見えてこない。

それに対して、宇佐美は敬語があるか否かに関わらず、ポライトネスを談話レベルで捉え、ディスコース・ポライトネス、つまり DP 理論を打ち立てている。宇佐美 (2002 b) ⁶ はポライトネスを「絶対ポライトネス」と「相対ポライトネス」とに分けられる。つまり、相手のフェイスを脅かす行為をせざるを得ないときに、face 侵害度に応じて FTA 軽減行為、つまり、有標行動として行われる「絶対ポライトネス」と、特に侵害度を軽減する必要もない状態で、ある言語文化における特定の状況ごとに暗黙のうちに共有されている、守られていて当たり前で、すなわち、無標行動によって構成される基本状態からの離脱や回帰という言語行動の動きから捉えられる「相対的ポライトネス」とに分けられる。「有標行動」の効果としてのポライトネス、つまり「有標ポライトネス」は、「話し手と聞き手のフェイス侵害度の見積もりの差」として捉える。有標行動がもたらし得る効果には、プラス・ポライトネス効果、ニュートラル・ポライトネス効果、マイナス・ポライトネス効果の3通りがある。これらは、言い換えると、「心地よい」、「特にポライトでもなく、不愉快でもない」、「不愉快」な効果である。一方、守られていて当たり前で、ある期待されている言語行動が現れないとき、初めてそれがないことが意識され、ポライトでない類、いわゆる「無標ポライトネス」は、「どういう談話或いは談話展開を『基本状態』と捉えるか」という「話し手と聞き手の『基本状態の認知』の差」として捉える。

話し手と聞き手による「見積もり差 (De 値) は、もちろん、絶対的な数値として算

出できるわけではないが、0 を挟む -1 から $+1$ までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができると思う。「見積もり差 (De 値)」と「行動の適切性」、「ポライトネス効果」の関係は、下の図 1⁷ のようになる。

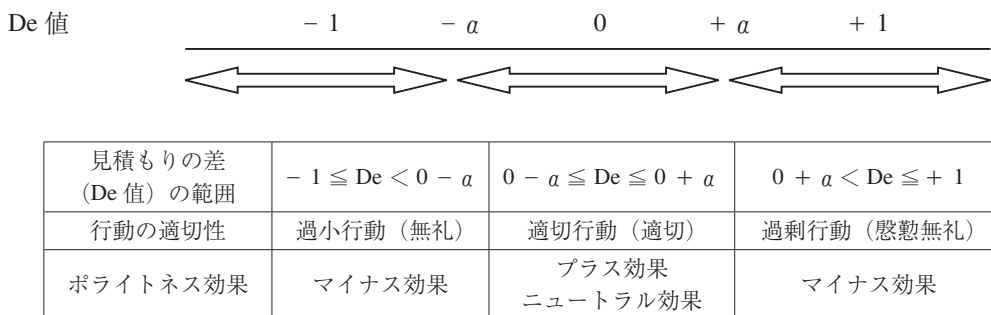


図 1 「見積もり差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」

出典：宇佐美 2003『国語学』第 54 卷 3 号 :128

注記：見積もり差 (De 値) : $De = Se - He$

Se：話し手側から見た「話し手の行為の face 侵害度」の見積もり

仮に $0 \sim 1$ の間の数値で示すものとする。

He：聞き手の側から見た「話し手の行為の face 侵害度」の見積もり

仮に $0 \sim 1$ の間の数値で示すものとする。

a ：許容されるずれ幅

特定の文化内における、談話毎の基本状態を同定し、そこからの逸脱によってポライトネスの効果を捉えるという宇佐美 (2003) の主張は新たな視点である。このように基本状態からの逸脱という観点からポライトネスを相対的に捉えることにより、日本語のような敬語のある言語もそうではない英語のような言語も統一的に扱うことができる。また、話し手の一方向的なストラテジーではなく、聞き手の視点による効果も考慮に入れ、有標ポライトネスと無標ポライトネスという談話レベルでの語用論的な区別をつけることができるようになる。

しかし、宇佐美 (2003) のディスコース・ポライトネス理論の基本状態には、ポライトネスのプラス効果とニュートラル効果が混在している。また、宇佐美は絶対的ポライトネスと相対的ポライトネスを区別しているが、特に FTA が高くない場合といっても、日本語の場合には普通体と丁寧体、尊敬語と謙譲語を用いるべきか否かというスピーチレベルの選択が常に働き、それがなんらかの意味で相手の規範から逸脱している場合に聞き手に違和感を抱かせる可能性があることから、あらゆる言語行動が基本的には FTA になりうる可能性を持っているといえる。よって、絶対的ポライトネスと相対的ポライトネスを区別する必要がないという指摘もある。

熊井浩子 (2009)⁸ は FTA 公式の中に D、P 要素のほかに話し手と聞き手の間にある

心理的距離を加える必要があると提唱している。社会における規範やストラテジーに基づいて合理的に選択するだけでなく、感情などの非合理的選択考慮することで、ポライトネスに関わる対人行動を的確に描写ができると述べている。

このように、B&L ポライトネス理論の日本語への適応性、敬語論とポライトネス論との接点をめぐって、いろいろ研究が行われてきたが、まだ多くの課題が残っているが、今後の研究に大きく期待されている。

参考文献

- 井出祥子 1989 'Formal forms and discernment: two neglected aspects of linguistic politeness' *Multilingua* vol. 8-2/3.
- Matsumoto Y 1988 "Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese." *Journals of Pragmatics* 12 : 403-426.
- 井出祥子 2006 『わかまへの語用論』 東京：大修館書店
- 滝浦真人 2008 『日本の敬語論』 東京：大修館書店
- 菊池康人 1995 現代敬語 Q&A 国文学 第40巻14号 :96.
- 宇佐美まゆみ, 2002b. 「ディスコース・ポライトネス理論構想 (4) - DP 理論の骨格 -」 『月刊 言語』 Vol.31 No.10:98-103.
- 宇佐美 2003 『国語学』 第54巻3号 :128.
- 熊本 浩子 2009 「日本語の Politeness と対人行動に関する一考察」 『静岡大学国際交流センター紀要』 3:1-26
- Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8, 223-248.
- B&L, 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press., 61.